空間・社会・地理思想 5号 90-104頁，2000年
Space, Society and Geographical Thought

再地図化および再命名
—アイルランドにおけるアイデンティティとジェンダー、景観の新しい地図学—

キャサリーン・ナッシュ*
（吉田 雄介** 訳）

Catherine NASH
Remapping and Renaming:
New Cartographies of Identity, Gender and Landscape in Ireland
Feminist Review, 44, 1993, pp.39-57.
© 2000 Routledge Publisher***

I 序

Spivak は、Mahasweta Devi の小説『ドウロティ、豊穣なるもの Douloti the Bountiful』を論じているが、その中で小説の顛末を次のように記している。インドの部族民出身の債務労働者の娘である Douloti は、父親の借金のかたに売春婦として売り飛ばされる。彼女は性病に蝕まれ、病院に徒歩で向かう途中で息絶え、独立記念日の祭典の準備で生徒たちにナショナリズムを教えるために地元の学校の校長によって校庭の地面に描かれたインドの地図の上に倒れた。翌朝、校長と生徒たちは、その地図の上に Douloti の遺体を発見することになる(Spivak, 1992a)。脱植民地化を果たした国家における国民的アイデンティティの主張と、女性というサバルタン［訳注：被植民者、女性、黒人といった従属させられた者を包括する名称］の存在の間に見られるこうした緊張関係は、地図と身体の間の問題をはらむ関係と言い換えられる。Devi の小説の中で地図は、国土の象徴、すなわち国民の「想像の共同体」（Anderson, 1983）を構成し、象徴する地理的外郭線を表している。

現代のアイルランド文化を検討する際にわたしは、フェミニズムとポストコロニアリズムの両者と関連させながらアイデンティティの問題を考察するだけでなく、「場所」および場所とアイデンティティの相互関連の問題にも注目する。場所をめぐる問題は、国民という抽象的なレベルで意味を持つ。それはまた、「景観」という概念（Rose, 1992）や、局地的な環境の感覚的で生きられた経験と結びついている場所との視覚的な関係にも関わっている。現代批評の中で、空間的な比喩ー位置、場所、地点、空間、地表、 領域、領土、大地、周辺、周縁、地図といった用語ーが復活している（Diprose and Ferrell, 1991: Tagg, 1992)。地図作製という比喩は、多くレベルで行なわれている。この空間的な比喩は、理論的・イデオロギー的な面での位置づけを表すことが最も一般的である。それはまた、地理的空間の中でのある地点を示すこともある。西洋と第三世界の関係の中でこのことは、理論的な位置と切り離されているわけではない。この比喩は、テクスト

* ノッチンガム大学院生　** 関西大学文学研究科院生
*** もともとの版権は，Taylor & Francis Ltd.(PO Box 25, Abingdon, Oxfordshire, OX14 3UE UK)にある。

や視覚的・多次元的芸術、伝統的な地図表現の中で、空間を表す多様な方法を概念化するために用いられ得る。わたしは、アイルランドの芸術家、Kathy Prendergastの作品を題材に、アイデンティティとジェンダー、身体、地図の間に存在する関係について本稿で議論を行なう。わたしはその議論の中で、地図作製という比喩を使うことによって、地理的空間を参照枠として持ち続ける。この比喩を活用する目的は、国家の「現実」と「想像の空間」を峻別するためではなく、それが純粋な理論的な位置づけ以上のものを指し示していることを明らかにするためなのである。

前置きとして述べておきたい最後の点は、人種やジェンダー、アイデンティティといった観念が、本稿において文化的・歴史的に形成された構築物として扱われるため、ここでは引用符なしに表記されることである（Butler, 1990; Epstein and Straub, 1992; Smith, 1992; Weedon, 1987）。Kathy Prendergastの作品が提示する諸問題を検討することによって、本稿は、フェミニスト的ないしポストコロニアル的な場所認識の可能性を探ろうとする。こうした認識は、生まれながらの有機的で直観的な自然への親近性という生物学主義的観念や、素朴で無邪気で人種的な自然への親近性という本質主義的観念を回避するものである。

わたしは、再地図化（remapping）と再命名（renaming）という用語を本稿のタイトルに選んだ。その第一の理由は、景観と言語の問題に注意を喚起し、アイルランド人のアイデンティティに関する考え方を整理する際に、この問題がジェンダーの問題と結びつけられる方法に注目するからである。第二の理由は、このポストコロニアルな文脈において、民族的アイデンティティに関係する文化主義の諸形態が、植民地の経験に対応してアイルランド人らしさの初期の構築という面で、それが達成される方法に着目するからである。19世紀におけるアイルランドの植民地的な地図作成と、アイルランド地名の英語化、およびアイルランド語の衰退は、現代アイルランド文化における文化的喪失と回復という主題を表現するための歴史的背景である。命名と地図作製という行為の両者とも、表象が持つ権力の存在を主張する。再命名と再地図化を試みることは、本当のアイデンティティと本当の場所との関係を回復するためにこの権力が必要であると主張することに他ならない。地図や地名の現代的な使用は、ジェンダーと言語、景観、アイデンティティの間でも広く承認された結びつきに関する考察を促す。けれども、植民地から独立への移行によって、男性権力に関する言説がなくなったわけではなかった。むしろそれらは、アイルランド民族主義者の言説の中に、新しい形で移植され翻訳された（Smyth, 1991）。

II　地理とジェンダー

Kathy Prendergastは、アイルランドの若い世代の芸術家の一人であり、伝統的なアイルランド風景画に対して批判的で皮肉に満ち、時にユーモアにあふれたアプローチを取り入れてきた。彼女の作品からは、地理とジェンダーをめぐる諸問題が立ち現れてくる。地図をモチーフとして用いる場合に、彼女の作品は、景観と女性の身体の間や、景観と領土の政治支配と女性のセクシュアリティの支配の間の関係性を露わにしている。Prendergastは、自分の作品のイメージをフェミニストによる表現として解釈されることを拒み、自分の作品を「私的な地理（personal geography）」の表象として描いている（Hanrahan, 1991:6）。しかし彼女の作品は、こうした身体の「私的な地理」と民族的景観との緊張状態が明示化されている事例として議論されている。1983年のスケッチの連作においても彼女の他の作品と同様、従来の常識的なスケールは乱され、別の伝統的絵画技法が参照されている。彼女は、言葉とイメージの間の創造的な相互作用、すなわち女性の身体の詳細な断面図と平面図、という手法を用いている。「オープンスペースの中の囲まれた世界 Enclosed Worlds in Open Spaces」（図1）において、首と足のない女性の身体のスケッチは、格子状の線、円弧の中心、身体／陸地を取り囲む海上の船からなる地図学的技法を思い起こさせる。地形学的・測量学的・土木学的な図式および平面図からなるスタイルが、「景観を管理する－灌漑 To Control a Landscape－Irrigation」（図2）、「景観を管理する－オアシス To Control a Landscape－Oasis」（図3）、および「景観を変える To Alter a Landscape」（図4）で用いられている。こうした技法は、解剖学的・婦人科医的な図解のスタイルと混ぜあわさっている。これらのスケッチの中で、支配・操作・変更の作業が、受動的な土地／身体の表面と内部で進んでいる。女性の身体の切開

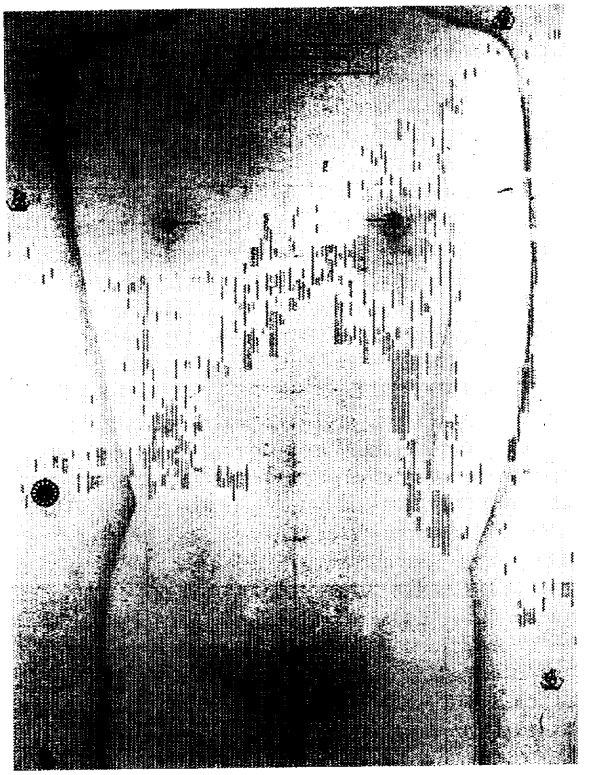

図1　キャシー・プレンデルガスト．　オープン・スペースの中に囲い込まれた世界

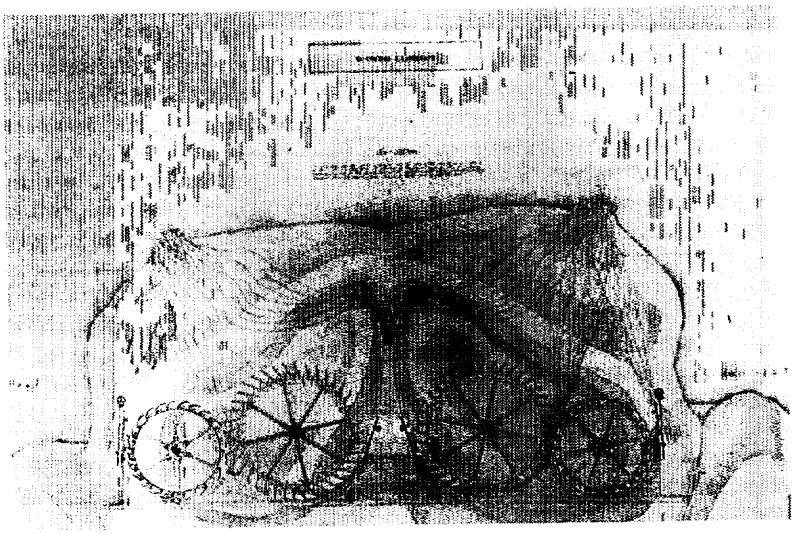

図2　キャシー・プレンデルガスト．　景観を管理する一灌漑

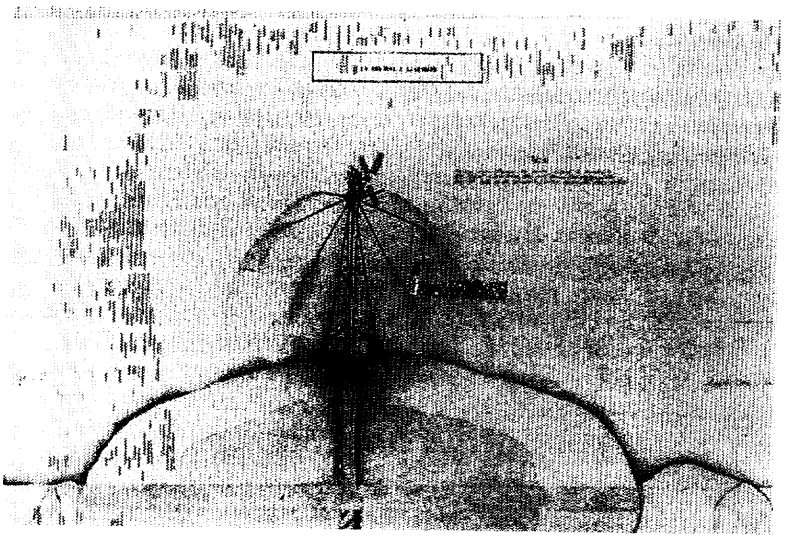

図3　キャシー・プレンデルガスト．　景観を支配する－オアシス

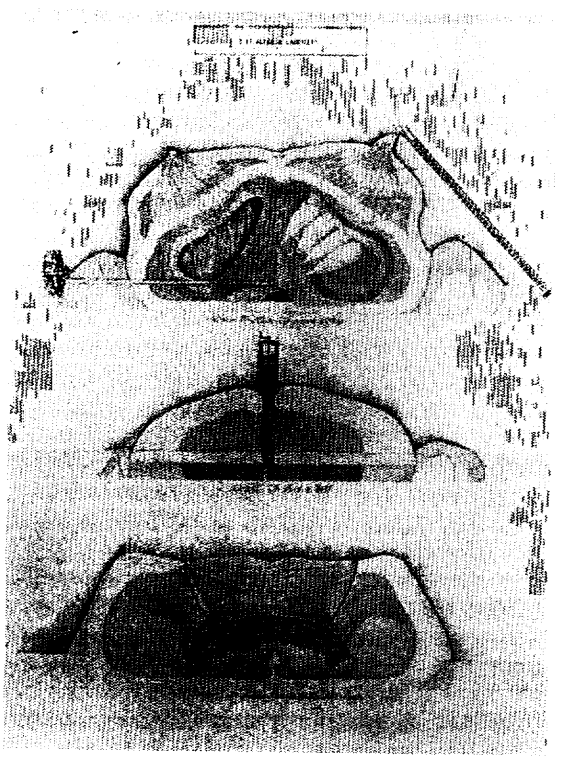

図4　キャシー・プレンデルガスト．　景観を変える

図において、それらは、19 世紀末の道徳医学的ポリティクスにおいて機能していた女性器の解剖学的スケッチを思い起こさせる。丁寧に描かれたデッサンの持つ静けさや、黄色く色褪せた古地図や海図の参照は、主体の問題の暴力をより強める。地図学的・地質学的・医学的な表現という複数の記載事項を用いるゆえに、そのスケッチは、複雑な多層性のテクストである。つまり、完成された完璧な意味が消費されるように提示するのではなく、鑑賞者を意味生成に関与させる。そのイメージは、探検家、航海士、技術者として、意味の完全性、総合性、単純性を追い求めるように、わたしたちを引きずり込む。けれどもイメージは、そのあいまいさ、「あいまいさの持つ名前を消し去る力」(Prentice, 1986:70) の中で理性や理解の過程を打ち砕く。他者の土地の植民地的支配と女性のセクシュアリティの支配の間の結びつきの親近性や、発見や領土拡大の言説におけるジェンダーの利用は、こうしたイメージの強固な鋭敏さによって失われてしまっている (Kolodny, 1975:Montrose, 1991)。

Kathy Prendergast は、外見上の中立性を脱構築するために、女性の表象という伝統に依拠している。Prendegast による多重描写が対抗戦略的な力を持っているのは、こうした伝統の面で女性芸術家としての彼女の皮肉な立場である。土地や景観という観念や、そうした観念と女性性の支配との関係を芸術家が利用することは、「本質的に女性的な人種」を支配しようとする植民地時代の試みと、アイルランド人らしさの構築とアイルランド女性の従属の中で、女性性・田園生活・景観といった観念を用いる独立後の試み、という歴史的文脈の中で理解可能となる (Cairns and Richards, 1988)。ジェンダーや民族的アイデンティティの問題は、いろいろな形で交錯している。つまり、国民という概念のジェンダー化の場合にも、国民的景観を女性と見なす観念の場合にも、人種、場所、国民といった問題や、ジェンダー役割を田園生活の理想化と表象に限定する場合にも、それらは交錯しているのである。女性としてアイルランドを象徴化することは、古代のアイルランド伝説の女神像、中世アイルランド文学におけるこの女神の擬人化、および、直接的な政治的反抗の表現に対する植民地時代の検閲に対して興った 18 世紀の古典詩であるエースリングにおける女性としてのアイルランドの寓意化、に由来する (O'Brien Johnson and Cairns,1991b:3)。それはまた、民族主義者の言説の中に取り入れられ、手が加えられ、論争の的となったアイルランドとアイルランド人の植民地的な女性化とも関係する (Butler Cullingford, 1990; Cairns and Richards, 1987, 1988)。女性としてのアイルランドという観念が長らく用いられてきたことは、男性の詩人がそれを私的アイデンティティと民族的アイデンティティの両者であると主張しているけれども (Riordan, 1985)、アイルランドにおける女性の象徴的使用やアイルランドの歴史からの女性の抹消、現代における女性の黙殺を確認し、強めている (Boland, 1989)。アイルランドにおける景観の伝統的な表象は、民族的アイデンティティとジェンダー・アイデンティティの両方の観念に満ちていて、とりわけアイルランド西部の心象で顕著である (Nash, 1993)。

Ⅲ 「西部の女性」: 20 世紀初頭のアイルランドにおけるジェンダー、民族および景観

1900 年代におけるアイルランド西部をイメージする際に、ジェンダーと景観、民族の間の多くの交錯が明示的となっている。人種的・文化的アイデンティティや女性性、セクシュアリティ、景観に関する諸言説が、文化的アイデンティティと政治的自由を確保しようと試みる中で用いられており、そうした多くの言説の中心には、西部のイメージが存在する。西部の構築は、アイルランドの歴史・文化という文脈、そして、当時の反近代主義・ロマン主義的始原論や人種的堕落という幅広い文脈の中で考察されなければならない。さらにまた、優生学、進化論や環境決定論、心霊主義、地方の復興に関するヨーロッパの言説という幅広い文脈や、民族を鼓舞し、蘇生しようとするアイルランド民族主義者の努力という具体的な文脈においても考察されなければならない。これらの諸言説は、民族的アイデンティティの観念と交錯し、場所と景観という観念が焦点となった。旅行記や写真、文学や絵画に描かれた西部の農婦のイメージは、その当時に議論の的となっていた女性性を表すいくつかの様式の一つであった。それは、女性性の観念と女性性を通じたアイルランド社会の将来の理想像に関する議論と具現化に関与した一連の言説の一部でもあった。アイルランドの婦人参政権運動はその当時、政治生活や独立国家の中で

の女性の役割に関して疑問を提起していて、その例は、女性による民族主義的軍事組織に見られた（Ward, 1983: Owens, 1984: Murphy, 1989）。政治的に活動的な女性が、男性による政治権力の独占を脅かしたことは、女らしさの役割・位置・本質を固定する傾向を強化することになった。こうした問題は、文化的純粋さと維持に対する関心と重複し、とくにアイルランドの文化地域としてのアイルランド西部のイメージが焦点となった。この地域の自然景観はイギリスらしさを持つ景観ときわめて対照的だった（Nash,1993）。人種的・性的・文化的純粋性さや、将来の独立したアイルランドの社会道徳構造への関心は、農婦の身体の上に注がれた。

典型的なアイルランド景観としての西部の視覚的表現法は、主にPaul Henryの絵画に基礎を持っていた。彼の作品は、周辺的なケルト文化に接近する際に精神性や安定性、真正性を求めるヨーロッパ初期のモダニスト文化的始原論の伝統の一部であった。Henryの作品は、西部における共同体や自然な精神性の感覚を探し求めるアングロ・アイリッシュの伝統にも負っていた。この二つの伝統と照応して、Henryの絵画に描かれた女性は、西部の視覚的表現法の一部となり、自然と景観との一見したところ自然な同定に基づいた女性性の観念の総体として作用した（図5参照）。

始原論は、生活様式と環境の間の一貫性、単純さ、直感、有機的関係の起源としては、アイルランド西部の限定的で肯定的な評論しか提供しないが、始原性は文明の階層の中で究極的には低位に位置付けられていた。帝国の中心の構築にとって、美術史も人類学も、画家のまなざしや分析的研究にとっての対象と「他者」を想定する差別的な言説として、始原論の生産に貢献した（Hiller, 1991）。女性と植民地を原始的と描く諸言説は、女性の植民地の主体を表象する際には融合していた。さらに、民族主義者の反都市主義と反帝国主義の結果、このように原始的とする行為化は、民族主義者による西部の説明でも引き続き行なわれた。原始的という観念が用いられたものの、都市や産業、植民地の権力と対抗するものとして、肯定的に評価された。西部や女性を原始と描くことは、始原性の持つ一見したところの非抑圧的な本能、セクシュアリティ、無意識な官能を強力な要素として持っていたけれども、文化的民族主義者によって用いられた道徳的純粋さと性的純潔を指し示すものとしての女性と調和させられなければならなかった。

植民地の景観の植民地的利用と、主体としての女性の生産の間には収斂が見られる一方、願望の景観として農婦と西部の表象の持つコードは、民族主義者の著作の中で再び利用された。強調の矛先がケルト的なものからゲール的なものへと移る中で、女らしさは、民族的特徴を要約するものとしては拒否されるようになった。それに代わり、反都市と民族主義、身体と健康、体格への関心といった観念は、女性の身体に、投影されるようになり、都市的で、工業的で根なし草なものとしてのイングランドに対抗して投影された。西部の人々を描写する際に服装を強調することは、人種・階級・地理といった要素から作られた民族的なアイデンティティの標章としての服装の重要性と対応する（Parker *et al.* 1992:10）。その重要性は、ゲール復興運動における民族服への関心に明確となり、その頂点は 1910 年代の「民族服論争」であった。この運動では、女性の着る赤いスカートへの強調は、生命力を示すものとして赤色の持つ象徴性や、古代の服装に見られるように赤色を民族的に愛するという信念、女性の生物学的機能を制限すると考えられる近代的服装の拒否、などと結びついた。服装への関心は、アイルランド民族主義において女性に与えられた文化的・生物学的役割という文脈の中で理解することができる。西部の女性への称賛は、堕落や反都市、身体の道徳経済、表象の性的ポリティクスへの関心といった諸問題と交錯している。

対照的に晩年の絵画や旅行写真には、若い女性のイメージが欠落していることが多い。これは、農村からの大量の人口流出というアイルランド農村社会の人口構造と、若い女性の表象という問題をはらんだ性質の両者を反映している。文化民族主義者、そして後には教会と国家は、無性の母性を概念化する中で女性の自律的なセクシュアリティを否定した女性性を構築したが、そこでは、理想化された田舎の女性の視覚的表象は、西洋絵画における女性の性愛化されたイメージの歴史とはうまく合致していなかった。若い女性は、伝説や民俗、言語、国家によって推奨された生活様式を象徴するだけでなく、母性の要求に従った人生の幸せな帰結を象徴する老農婦の描写によって置き換えられた。別の場合には、農婦の描写は、ゲール的な男性の

理想を典型的に示す西部の男性の描写によって置き換えられた。このように、アイルランド人によるアイルランド運動（Irish Ireland movement）の民族主義作家は、女性としてのケルトという19世紀の構築への反動として、「ゲール」の本質的特徴として男性性を主張した。「女性」という観念は、民族的精神と、アイルランドの国土の寓話的人物を具現化し続ける一方、アイルランドの国土は明らかに男性的な土地となった。西部は、ケルトの女性性や自然な精神性とは対照的に、ゲールや男らしさ、健全さ、実用主義、カトリック主義として再定義された。こうした女性性の否定は、カトリック主義によるセクシュアリティの支配とも結び

図5　ポール・ヘンリー．ジャガイモを掘る人

ついていた、この道徳規範は、家族単位の農家経営という経済・社会制度を支え、相続権の統制のためにセクシュアリティの規制を必要とした（Cairns and Richards, 1988)。この社会秩序にとって自律的な女性のセクシュアリティは脅威と認識されたため、ゲールの男性と釣り合いのとれる女性は、脱性愛化された母親像でなければならなかった。

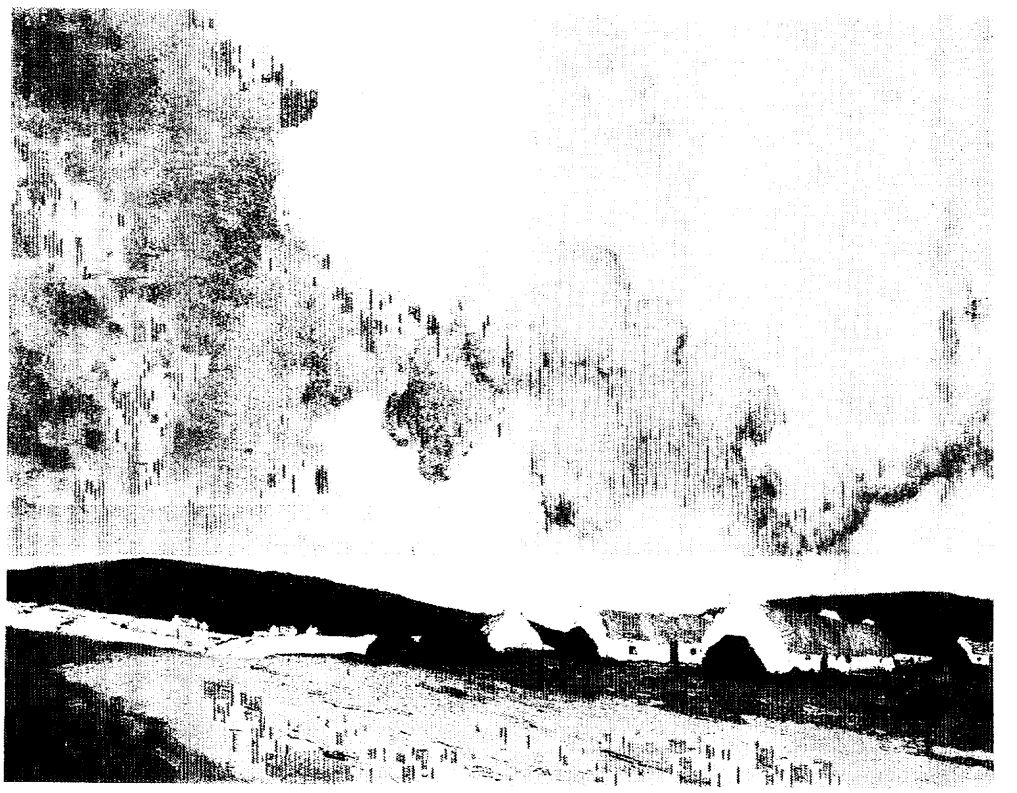

図６　ポール・ヘンリー、コネマラ・コテージ

景観の中の田舎家は、伝統的な田舎の家族生活やそれと結びついた道徳性とジェンダー役割の理想化の持つ文化的な重要性を意味するようになった。それは、田舎のアイルランド女性の描写や、母性・伝統・安定性といった価値に取って代わるものとなった（図6を参照せよ）。「人種の揺りかご」としての田舎家は、男性的なゲールの養育者や再生産者としてだけ積極的な意味を持つ女性、人種を維持するものとしての女性、という観念を生み出した。アイルランド民族主義の社会的に均質な絆帯は、身体のポリティクスからの女性の排除に依存する一方、景観を女性と見る考え方は、場所との男性主義的な関係を可能にした。女性を家庭の領域に限定する諸言説は、同時に民族の人口を維持するという責任を女性に押し付けた。女性の機能は、男性性として表象される「身体ポリティク」の身体を再生産することにある（Gatens, 1991）。アイルランドの民族的言説の中での身体と国家の融合（これは、同時代の英国における優生学運動で顕著に認められる）は、この「身体ポリティクス」に対する関心、つまり国家と国民に対する関心を体系的に表現するための手段を提供した。国民に対する関心は、景観という観念と密接に結びついていた。環境と人間との有機的な結びつきという考え方は、現在の気候学や民族地理学という科学的な諸概念を用いた諸言説において海外移民を抑えるために活用された（Livingstone, 1991, 1992; Stepan, 1985）。人口減少への危惧は、アイルランド西部からのアイルランド語の話し手、文化の保持者、屈強な遺伝的血統が失われたために、より切実なものとなった。海外移民に対する憂慮はジェンダーと人種の問題と融合し、「最良の母親や妻となるはず」の人口の喪失は、「臆病や馬鹿やのろまを故郷に置き去りにして、人種の堕落を促し、怠慢な息子を生み出す」ように感じられた（Russell, 1912:67-8）。人種的な誇りと人種的な憂慮という二つの観念は、このように女性の身体の上に投影された。

「アイルランドの最後の拠り所」としての田舎家は、アイルランドの言語と伝統、民俗の保護と再生産を象徴しており、それに対して女性は育児者としての能力の点で重要な責任を持つと考えられた。もちろんこれは、他の民族主義運動の中で女性に割り当てられた役割とも対応していた（Yuval-Davis and Anthias, 1989）。田舎家はまた、アイルランド独特な集落形態の基本単位と見なされ、それゆえ英国文化に対抗するアイルランドの社会組織の象徴として考えられた。つまり孤立した田舎家は、景観の形態的要素と道徳的・精神的領域の両面において、アイルランド社会の理想的形態を具体的に表していた。アイルランド風景画における描写は、その基盤となるアイルランドのアイデンティティとジェンダー・アイデンティティの構築に寄与した。20世紀初頭のアイルランドにおける景観の表象は、民族的アイデンティティとジェンダー・アイデンティティの両者に関して、意味のコード化が行なわれた。

Ⅳ ポストコロニアリズム、フェミニズム、景観

現代の心象景観は、植民地時代や初期の民族主義者の文脈における歴史的活用と、そうした活用において暗黙となっている人種やジェンダーの問題の両方に立ち向かわなければならない。主体の土地の植民地的な地図化と家父長制における女性の表象のどちらも、支配者の視点の安定性を強化し、それ以外の見方を否定したり抑圧しようとする表象形態である。地図は、植民地政策を実行する際に実質的に役割を果たしている支配への願望を表すものとして解読することができる。地図作成において用いられる諸戦略（空間の再書き込み、囲い込み、階層化）は、植民地権力の獲得・管理・強化に関する類似物を提供する。地図の編集過程において、世界は標準化され、規律化され、流用され、支配される（Huggen, 1989; Harley, 1988, 1992）。アイルランド景観の地図化は、たんに統治を容易にするために役割を果たしただけでなく、「他者」を固定し、地図の一貫性という表面上の安定性によって差異の恐怖を緩和した（Andrews, 1975; Hammer, 1989 a, 1986 b）。地図と同じように女性の表象は、支配と意味を持った用途の景観としてその身体を固定化する。安定性が保証され得ない支配者の視点に依拠した地図は、それに代わる空間的布置を覆い隠すものとして姿を現す。この代替は、世界に関して持ちうる視点の多様性と、単一の世界モデルの不適切さを示している（Huggen, 1989）。

フェミニズムとポストコロニアルリズムは、ポストモダニズムに対して問題をはらむ関係を共有しており、ポストモダニズムは両者の批判的洞察を流用し、それ

らの起源や政治的効力を消し去っている（Tiffin, 1987b ; Adam and Tiffin, 1991;Bondi and Domosh, 1992)。ポストコロニアリズムもフェミニズムもその焦点は、アイデンティティのポリティクスと、差異のポリティクスとの衝突にある（Best and Keller, 1991)。普遍的主体や安定したアイデンティティの核心部というヒューマニストの概念をポスト構造主義者が拒否していることは、フェミニズムとポストコロニアリズムの持つ解放と連帯という目標を傷つける。しかし、どれほど困難に満ちていようと、ポスト構造主義理論におけるアイデンティティの概念は、フェミニズムとポストコロニアリズムによる場所との関係を考察するための一つの道筋を提示しており、その方法は、マスキュリニストとコロニアリストの言説に見られる本質化を回避している。土地と土地所有の問題はコロニアルな状況において重要であるが、景観と場所の認識が文化的アイデンティティの重要な源泉となるようなポストコロニアルな状況においても、象徴的に重要である。それゆえ、民族的アイデンティティと景観の間の結びつきは、ポストコロニアルな場所の文学的・象徴的な再活用に明白である。ポストコロニアル文学では、場所との実質的な関係の発展や回復は、表面的に優れた文化的・人種的な植民地権力によって位置の置き換えや文化的中傷が行なわれた後の時代において、アイデンティティの置き換えや危機の感覚を克服するための一つの手段となる（Gray, 1986;Ashcroft *et al.* 1989)。

けれども、Annamaria Carusi が主張するように、「皮肉やパロディーを込めない方法で『アイデンティティ』、『意識』、『起源』といった語を含んでいる言説は、ポスト構造主義者の視点からは退行的で反動的と思われる」（Carusi, 1991:100)。したがって、ポストコロニアルなテクストのもつ二重の主張とは、「そのレトリックの脱構築的な読みを通して（新）植民地主義への抵抗を持続し、文学の中で文化的アイデンティティと生存原理として、主題のレベルやリアリストの問題構制の内に表面化するような、ポストコロニアルな社会的伝統を取り戻して再書き込みすること」（Selmon, 1991:5）となる。換言すれば、ポスト構造主義は、アイデンティティという概念の≪批判的≫使用を認めないわけではない。アイデンティティを問題構制とすることによって景観という観念の文化的使用が可能となり、これによって土地の人を自然の景観と生物学的に結びついたものとしてステロタイプ化するために植民地主義者の言説における景観という観念の使用を拒むことができるようになる。同様にフェミニストによる景観と場所という観念の使用は、エコフェミニズムに潜む本質主義の危険（Plumwood, 1998;Warren, 1987; King, 1990; Merchant, 1990）や、女性と景観との関係を生まれながらの生物学的・心理学的構造の観点から捉える説明の危険（Norwood and Monk, 1987b; Rudnick, 1987)、景観という観念の男性主義的な扱いの危険（Rose, 1992)、に立ち向かわなければならない。アイデンティティの持つ構築された性質を認識することによって、固定化されて自然で生得的なアイデンティティを意味することなしに、景観をアイデンティティ形成の源泉として用いることが可能となる。

V 再命名、ジェンダー、ポストコロニアルな景観

ポストコロニアルな文脈において景観の使用がどれほど重要であろうと、その使用がジェンダーの問題を提起していないなら問題である。独立後のアイルランドでは、地名に関する多くの実証的調査が行なわれてきた。国土地図への地名の再書き込みや、文化的な比喩としての地名の使用は、民族的アイデンティティにとって核となる二つの要素である言語と場所を結びつけている。地名の意味や本来の地名を回復しようとする試みは、失われた場所との結びつきの回復を求めることと結びついていることが多く、それは、アイルランドではもはやあまり使われない言語で表示されている。アイルランドの地名は、ポストコロニアルなアイデンティティの探求において用いられている文化的な言外の意味を伝えていて、植民地化によるアイルランド語の喪失の歴史、人口減少と海外移民の歴史、19世紀の地図作製事業における地名の植民地的英語化という背景を伝える。

現代におけるこうした地名や地図の使用は、言語と景観、アイデンティティの間で当然と見なされている結びつきへの熟慮を促す。つまり、場所に対する感じ方という問題や意味を回復する可能性、歴史、真正さに対する熟慮である。

多くの現代アイルランド詩において、景観という観念が用いられている。場所は名前が付けられている。

この命名は、言語の喪失という観念に結び合わされる。さらに、言語のこうした衰退は、現在よりももっと親しみがあって真正であると考えられている独特な生活様式や場所との関係の喪失と結びつけられる。詩人にとって、地名が喚起する力とは、景観に関する共有された社会的記憶に対して一つの鍵を提供する。そうした記憶の集団的意味は、共同体の知を統合する宝庫の一部である。アイルランドにおける詳細な地名調査は、こうした喪失と回復の感覚で染め上げられている。言語と土地との関連性とが絡み合っていることは、特定な景観を描写するために本来的に適切なものとしての言語の観念や、単語が不可欠な文化的本質を伝えるという観念に依拠している。さらに、詩の中でのアイルランド語地名の使用によって、文化的差異をテクストに挿入することが可能となる（Ashcroft *et al.* 1989)。

けれどもこうした使用が、ジェンダー化された景観の観念と結びつけられる場合には、問題をはらむようになる。例えばそれは、ジェンダーの二元性がポリティクス・場所・言語の諸概念と融合している Seamus Heaney の著作に見られる。アイルランドとイングランドの関係についてのジェンダー化された考察に対して、Heaney は、差異の象徴としてのジェンダー化された言語という見方を付け加える。Heaney にとって詩の創作とは、男性的な意思や知性と、女性的な一群のイメージや情動との出会い」であり、「女性的な要素」は「アイルランドのことがら」と関係し、男性的な要素は「英国文学との関わりから導かれた」（Heaney, 1980 a:34)。こうしたジェンダー的対極性は、場所を知るようになる方法の考察にも適用される。Heaney にとって、この二つの方向、つまり「生き生きとした文字の読めない無意識と、学問知識のある文字の判る意識」は、ゲール的な女らしさとアングロ・サクソンの男性的な意識に対応している（Heaney, 1980 a:131)。北部の文化地域を差異化する地名は、言語と命名の統語論によって場所を知るさまざまな方法を示している。アイルランドの女性的な言語は、柔らかくて「しわがれ声」で肉感的であり、母音に富んでいる。植民者のなわばりは、「子音で杭を打って仕切られる」(Heaney, 1980b:27)。アナホリッシュは、「子音の緩やかな斜面　母音の牧場」である（Heaney, 1980 b:21)。モヨラ川という地名の中で、「喉を鳴らして流れる黄褐色の水は、自分の心を綴っている…母音の歴史を通して、靄を吐き出している」(Heaney, 1980b:22)。

女性的な声という観念は、重要なフェミニスト的利用法を持っている一方、Heaney によるそれの使用は問題をはらんでいる（Cameron, 1985)。Heaney の詩は、女性の故郷を祝賛し、故郷から離されることを嘆き悲しむ。詩人が故郷から遠く離れ、アイデンティティと能動性、独立を主張できるのは、受動的で有機的、女性的なものとしてのこうした田舎家の景観の構築に対してである（Coughlan,1991)。

Ⅵ　アイデンティティの脱領土化

わたしが以上で指摘したことは、アイデンティティをめぐる諸概念へのポストコロニアルとフェミニストの関与と、場所との関係を通したその確保が、マスキュリニストや植民地の言説の二元性を再現する危険性を持つことであった。自然との親近性は肯定的に評価されているが、それは、文化／自然の二元性をそのまま残している。この最終章では、何らかの立場の戦略的な使用を損なうことなしに、多元的な視点を可能とするような場所の観念に関するポストコロニアリストの使用の可能性を考察する。1991 年に、Kathy Prendergast は、「土地 Land」（図 7，Curtis, 1991）という作品を展示した。この作品は、地形図の色・線・画法で描かれた画布のテントから構成されていた。平面的で二次元の道具としての地図に、容積と高さが与えられた。地図そのものが、表象の対象となる。この作品において、「土地」は、地図が表現しようとする景観そのものとなった。表象とその対象の間のこの遊びは、現実と表象の単純な同一視という観念を打ち砕く。地図表現の権威は覆される。「自然な」対象と「模倣された」対象の間の関係は、「現実」世界の「客観的な」表象でもなく、「主観的な」再構築としても呈示されず、客体と主体の安易な区分を問題構制とするような別々のシミュラクル間の遊びとして呈示される（Huggen, 1989)。「土地」の中の地図は、移ろいゆく大地、抑圧的な固定性と堅牢さからアイデンティティと景観の概念を解放する空間的比喩となる。

アイルランドを扱った多くの作品において、景観は、文化の糸によって縫い付けられ、その歴史的、文化的な重荷を背負わされている。「土地」においては、景観

とアイデンティティの観念は飛翔し、抑圧的なアイデンティティの固定性から解放される。土地は、流動性と開放性の可能性や多元性の可能性を象徴し、「名前」と「地図」を拡散させることができる。Gilles Deleuze と Felix Guattari にとって地図は次のようなものである。

それは開かれたものであり、そのあらゆる次元において接続可能なもの、分解可能、裏返し可能なものであり、たえず変更を受け入れることが可能なものである。それは引き裂かれ、裏返され、あらゆる性質のモンタージュに適応し、一個人、一グループ、一社会集団などによって実行されうる。それを壁に描くのもいいし、芸術作品としてとらえるのもよく、政治行動としてあるいは瞑想として構築するのもいい（Deleuze and Guattari,1987:12)。

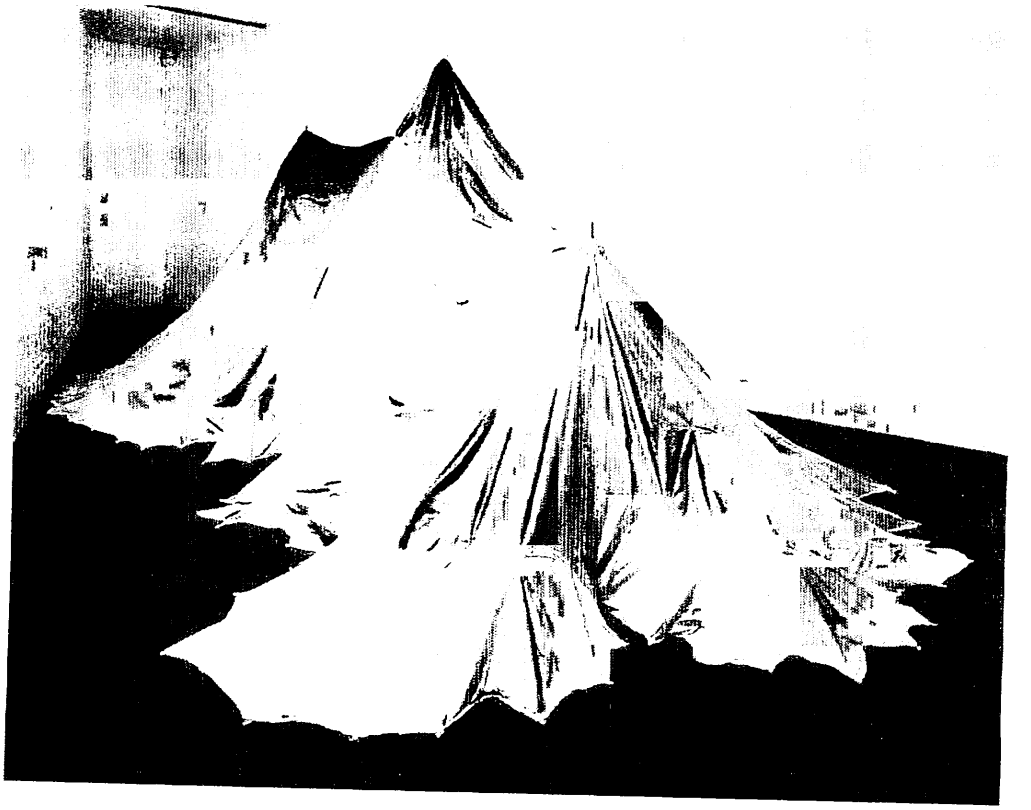

図7　キャシー・プレンデルガスト．　土地

この地図学では、地図は均質な（「閉じた」）構築物ではなくリゾーム的（「開いた」）な構築物として知覚され、それは、脱構築から再構築へ、地図の破壊から地図作製へとの力点の移行を可能にする。

こうした地図の使用によって、文化的、歴史的な位置を持った植民地的言説の批判が可能となり、開放的で、変化可能で、作り直し可能な別のアイデンティティの布置が可能となる（Prentice, 1986）。同様に身体は、社会的に書き込まれた属性が権力の利用の一部として機能するテクストとして読まれ得る。Elizabeth Grosz が述べているように、身体は、知ー権力の場所であると同様に、「抵抗の場所でもある。なぜなら身体は頑強であり、対抗戦略的な再書き込みの可能性を常に持っているからである。そして、別の方法で自己を刻印し、自己を表象することができるからである（Grosz, 1990:64）。空間と身体という二つの概念は、多元的な布置が可能である。身体と景観の表象における対抗戦略的な可能性を認識することは、固定化されたアイデンティティの概念に依存しておらず、身体／土地関係を多くの方法で表象することが可能となる。景観は、横断したり、横切って旅行したり、その中に入ったり、身近に知ったり、見つめたりすることができる。景観の概念が植民地の言説や男性主義の言説によってどれほど汚されようとも、アイデンティティに関するポスト構造主義者の理解は、その再流用を可能にする。ポストコロニアルとフェミニストによる再地図化と再命名は、ある権威的な表象を別なものに置き換えるのではなく、複数の名前や複数の地図に置き換える。

注

本論文の草稿は、1992年5月にゴールウェイの University College で開催された「ジェンダーと植民地主義」という会議に提出されたものである。

Catherine Nash は現在、ノッティンガム大学の地理学と美術史学研究科で、20 世紀のアイルランドにおける景観、ジェンダー、アイデンティティをめぐる諸問題についての博士論文を執筆中である。

参考文献

ADAM, Ian and TIFFIN, Helen (1991) editors, *Past the Last Post, Theorising Post Colonialism and Post Modernism* New York and London: Harvester Wheatsheaf.

ALCROFT, Linda (1988) 'Cultural feminism versus post-structuralism: the identity crisis in feminist theory' *Signs: Journal of Women in Culture and Society* Vol. 13, No. 3: 405-36.

ANDERSON, Benedict (1983) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* London: Verso. （アンダーソン, B.／白石さや・白石隆訳（1997）『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』NTT 出版）

ANDREWS, John (1975) *A Paper Landscape* Oxford: Clarendon Press.

ASHCROFT, Bill et al. (1989) *The Empire Writes Back: theory and practice in post-colonial literatures* London: Routledge.

BEST, Steven and KELLNElt, Douglas (1991) *Postmodern theory: critical irlterrogations* London: Macmillan.

BOLAND, Eavan (1989) *A kind of scar: the woman poet in a national tradition* Dublin: Attic Press.

BONDL Liz and DOMOSH, Mona (1992) 'Other figures in other places: on feminism, postmodernism and geography' *Environment and Planning D. Society and Space* Vol. 10, No. 2: 199-213.

BUTLER CULLINGFORD, Elizabeth (1990) ' "Thinking of her . . . as . . . Ireland": Yeats, Pearse and Heaney *Textual Practice* 4, 1 : 1-21.

BUTLER, Judith (1990) *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity* London: Routledge. （バトラー, J／竹内和子訳(1999)『ジェンダー・トラブル』青土社）

CAIRNS, David and RICHARDS, Shaun (1987) 'Woman in the discourse of celticism', *Canadian Journal of Irish Studies* 13, 1: 43-60.

—— (1988) *Writing Ireland: Colonialism, Nationalism and Culture* Manchester Manchester University Press.

CAMERON, Deborah (1985) *Feminism and Linguistic Theory* London: Macmillan Press.

CARUSI, Annamaria (1991) 'Post, post and post, or, where is South African literature in all this?' in ADAM and TIFFIN (1991).

COUGHIAN, Patrica (1991) ' "Bog Queens": the representation of women in the poetry of John Montague and Seamus Heaney' in O'BRIEN JOHNSON and CAIRNS (199la).

CURTIS, Penelope (1991) editor, *Strongholds: New Art from Ireland* catalogue for the exhibition, 20 February-7 April 1991 , Liverpool: Tate Gallery.

DELEUZE, Gilles and GUATTARI, Félix (1987) *A Thousand Plateaus: Capitalism and Schizophrenia* translated by Massumi, B., Minneapolis: University of Minnesota Press. (ドゥルーズ, G.・ガタリ, F.／宇野邦一他訳(1994)『千のプラトー——資本主義と分裂症』,河出書房新社)

DIPROSE, Rosalyn and FERRELL, Rebyn (1991) *Cartographies: poststructuralism and the mapping of bodies and spaces* Sydney: Allen & Unwin.

DOUGLAS HYDE GALLERY (1990) *Kathy Prendergast* (Exhibition catalogue with essay by Conor Joyce).DRIVER Felix and ROSE, Gillian (1992) *Nature and Science: Essays on the History of Geographical Knowledge* Historical Research Series, 28.

DURING, Simon (1985) 'Postmodernism or postcolonialism' *Landfall* Vol. 39, No. 3: 366-80.

EPSTEIN, Julia and STRAUB, Kristina (1992) editors, *Body Guards: The Cultural Politics of Gender Ambiguity* London: Routledge.

GATENS, Moira (1991) 'Corporal representation in/and the body politic' in DIPROSE and FERRELL (1991).

GRAY, Stephen (1986) 'A sense of place in the New Literatures in English' in NIGHTINGALE (1986) 5-12.

GROSZ, Elizabeth (1990) 'Inscriptions and body-maps: representations and the corporal' in Threadgold, Terry and Cranny-Francis, Anne (1990) editors, *Feminine Masculine and Representation* Sydney: Allen & Unwin.

HAMMER, Mary (1989a) 'Putting Ireland on the map' *Textual Practice* (Summer) 184-201.

—— (1989b) 'The English look of the Irish map' *Circa* 46 (July/August) 23-5.

HANRAHAN, Johnny (1991) 'Notes on a conversation with Eilis O'Connell, Kathy Prendergast and Vivienne Roche' in *Edge to Edge - Three Sculptors from Ireland* Dublin: Gandon Editions.

HARLEY, J. B. (1988) 'Maps, knowledge and power' in Daniels, Stephen and Cosgrove, Denis (1988) editors, *The Iconography of Landscape: essays in the symbolic representation. design and use of past environments* Cambridge: Cambridge University Press : 277-312.

—— (1992) 'Deconstructing the map' in Barnes, Trevor J. and Duncan, James S. (1992) editors, *Writing Worlds: Discourse, Text and Metaphor in the Representation of Landscape* London: Routledge: 231-47.

HEANEY, Seamus (1980a) *Selected Poems* London: Faber.

—— (1980b) *Preoccupations: Selected Prose 1968-1978* London: Faber. (ヒーニー, S.／村田辰夫・坂本完春訳(1995)『シェイマス・ヒーニー全詩集 1966～1991』,国文社)

HILLER, Susan (1991) editor, *The Myth of Primitivism: Perspectives on Art* London: Routledge.

HUGGEN, Graham (1989) 'Decolonising the map; post-colonialism, post-structuralism and the cartographic connection' *Ariel: A Review of International English Literature* Vol. 20, No. 4 (October) 115-31.

KING, Y. (1990) 'Healing the wounds: feminism, ecology and the nature culture dualism' in ORENSTEIN and DIAMOND (1990).

KOLODNY, Annette (1975) *The Lay of the Land: Metaphor as Experience and History in American Life and Letters* Chapel Hill: University of North Carolina Press.

LIVINGSTONE, David N. (1991) The moral discourse of climate: historical considerations on race, place and virtue' *Journal of Historical Geography* Vol.17: 413-34.

—— (1992) '"Never Shall ye Make the Crab Walk Straight": an inquiry into the scientific discourses of racial geography' in DRIVER and ROSE (1992) 37-47.

MAXWELL, Desmond Ernest Stewart (1965) 'Landscape and Theme' in Press, John (1965) editor, *Commonwealth Literature* London: Heinemann: 82-9.

MERCHANT, Carolyn (1990) 'Ecofeminism and feminist theory' in ORENSTEIN and DIAMOND (1990).

MONTROSE. Louis (1991) 'The work of gender in the discourse of discovery' *Representations* Vol 33: 1-44.

MURPHY, Cliona (1989) *The Women's Suffrage Movement and Irish Society in the Early Twentieth Century* New York: Harvester Wheatsheaf.

NASH, Catherine (1993) 'Embodying the nation - the West of Ireland landscape and Irish national identity in Cronin, Michael and O'Connor, Barbara (1993) editors, *Tourism and Ireland: A Critical Analysis* Cork: Cork University Press.

NIGHTINGALE, Peggy (1986) *A Sense of Place in the New Literatures in English* St Lucia, New York and London: University of Queensland Press.

NORWOOD, Vera and MONK, Janice (1987a) editors, *The Desert is No Lady: Southwestern Landscapes in Women's Writing and Art*, Yale: Yale University Press.

—— (1987b) 'Introduction - perspectives on Gender and Landscape' in NORWOOD and MONK (1987a) 1-9.

O'BRIEN JOHNSON Toni and CAIRNS, David (1991a) editors, *Gender in Irish Writing* Buckingham: Open University Press.

—— (1991b) 'Introduction' in O'BRIEN JOHNSON and CAIRNS (1991). ORENSTEIN, Gloria and DIAMOND, Irene (1990) editors, *Reweaving the World: The Emergence ofEcofeminism*, San Francisco: Sierra Club.

OWENS Rosemary Cullen (1984) *Smashing Times 'A History of the Irish Woman's Suffrage Movement 1898-1922* Dublin: Attic Press.

PARKER, Andrew, RUSSO, Mary, SOMMER, Doris and YAEGER, Patricia (1992) 'Introduction' in Parker, Andrew, Russo, M, Sommer, Doris and Yaeger, Patricia (1992) editors, *Nationalisms and Sexualities* London: Routledge: 1-18.

PLUMWOOD, Val (1988) 'Woman, humanity and nature' *Radical Philosophy* (Spring) 16-24.

PRENTICE, Chris (1986) 'Rewriting their stories, renaming themselves: post-colonialism and feminism in the fictions of Keri Hulme and Audrey Thomas' *SPAN: Journal of the South Pacific Association for Commonwealth Literature and Language Studies* Vol. 23: 68-80.

RIORDAN, Maurice (1985) 'Eros and history: on contemporary Irish poetry *The Crane Bag* Vol. 9, No, 1: 49-55.

ROSE, Gillian (1992) 'Geography as a science of observation: the landscape, the gaze and masculinity in DRIVER and ROSE (1992).

RUDNICK, Lois (1987), 'Re-naming the land - Anglo expatriate women in the southwest' in NORWOOD and MONK (1987a) 10-26.

RUSSELL, George (1912) *Co-operation and Nationality* Dublin: Maunsel.

SLEMON, Stephen (1991) 'Modernism's last post' in ADAM and TIFFIN (1991) 1-9.

SMITH, Paul Julian (1992) *Representing the Other: 'Race', Text and Gender in Spanish and Spanish American Narrative* Oxford: Clarendon Press.

SMYTH, Ailbhe (1991) 'The floozie in the jacuzzi' *Feminist Studies* Vol. 17, No. 1 (Spring) 16-24.

SPIVAK, Gayatri Chakravorty (1992) 'Women in difference: Mahasweta Devi's "Douloti the Bountiful" ' in PARKERl *et al.* (1992) 96-117.

STEPAN, N. (1985) 'Biological degeneration: races and proper places' in Chamberlain, J. E. and Gilman, S. L. (1985) editors, *Degeneration: The Dark Side of Progress* New York: Columbia University Press.

TAGG, John (1992) *Grounds of Dispute: Art History, Cultural Politics and The Discursive Field* London: Macmillan: 1-39.

TIFFIN, Helen (1986) 'New concepts of person and place in "The Twybon Affair and "A Bend in the River" in NIGHTINGALE (1986).

— — (1987a) 'Post-colonial literatures and counter-discourse' *Kunapipi* Vol. 9, No. 3: 17-34.

—— (1987b) 'Post-colonialism, post-modernism and the rehabilitation of post-colonial history' *Journal of Commonwealth Literature* Vol.1 : 169-81.

WARD, Margaret (1983) *Unmanageable Revolutionaries: Women and Irish Nationalism* Dingle: Brandon. WARREN, Karen J. (1987) 'Feminism and ecology: making connections' *Environmental Ethics* Vol. 9: 2-20.

WEEDON, Chris (1987) *Feminist Practice and Poststructuralist Theory* Oxford: Basil Blackwell.

YUVAL-DAVIS, Nira and ANTHIAS, Floya (1989) editors, *Women-Nation-State* New York: St Martin's Press.